特 集

日本風工会 40 周年記念

40 年の思い出をまとめますと To Summarize the Memories of 40 Years

田村幸雄*

Yukio TAMURA

懐かしいのは、日本風工学会の草創期の1980年頃に、臨時の事務局員として週1, 2回、中野坂上の風工学会研究所に通ったことです。事務局、編集委員会幹事、運営委員会幹事を兼ねたような仕事で、石崎潑雄会長、吉田正昭事務局長の計らいでアルバイト料を頂きました。浮浪者のような生活を見るに見かねてのことだったのでしょう。吉田正昭氏が風工学会研究所を立ち上げられて間もない頃で、皆さん意気軒昂でした。日野幹雄編集委員長のもと、まずは不定期だった会報を年4回の会誌として発行するようにしました。会員の参加意識向上と結束維持に不可欠だからです。1982年1月の会誌11号の編集後記にこれを宣言したお陰で、後々かなり苦勞をしました……。こんな中でも、1982年からの6年間、会誌の表紙に使わせて頂いた赤木久真氏のLESによる角柱周りの流れ図を、内緒で毎号少しづつ時間を送り、並べると流れのコマ送りが見られるような、そんな悪戯もしました。

途中を一举に省略し、私が会長に就任した2004年に跳びます。就任直後、学会事務センターの預かり金不正流用事件が発生しました。7月3日に情報を得るやいなや、白土博通事務局長、日比一喜財務担当理事、中村修監事らと学会事務センターにねじ込み、頭を抱えている専務理事等を相手に強く交渉し、一部に過ぎませんが、300万円を7月末に返却させました。8月上旬に事実上倒産して資産が凍結されるという、間一髪での回収でした。後の、債権者である学会連合と学会事務センターとの交渉集会の際に、“抜け駆けをした学会が有る”と非難されまし

た。しかし、これは学会活動を守るための当然の合法的な努力です。就任の所信表明として会誌2004年7月号巻頭言に書いた「闘う風工学、闘う学会!」をまさに地で行く、皆さん方の努力でした。なお、学会事務センターとの示談が成立した後に各学会へ返却された和解金はわずか20万円でした。2004年は10個の台風が上陸するなど異常な災害年でもありました。2005年末から2006年11月にかけては、酒田、延岡、佐呂間と計17名もの死者を出す竜巻被害が続きました。これらを受けて、2005年6月に学校体育館等の屋根被害対策等を訴えた『強風災害に関する提言』を、2006年4月には竜巻等突風対策の重要性を訴えた『積乱雲に伴う竜巻あるいはダウンバーストなどの小規模気象擾乱による風災害抑制に関する提言』を政府に出すなど、波乱に満ちた4年間でした。とは言え、これらの活動が、気象庁の竜巻注意情報の開始(2008年)や日本版改良藤田スケールの運用(2016年)に結びついたと確信します。任期中で嬉しかったのは、立川正夫先生の飛散物に関するご業績が評価され、Tachikawa数が2007年の国際風工学会総会で認定されたことです。

以上の他、思い出は諸々有りますが、清水義範の『国語入試問題必勝法』風にすべてを全8文字で要約しますと、句読点も入れて「いろいろ有った。」となりましようか。

* 東京工芸大学 名誉教授
Professor Emeritus, Tokyo Polytechnic University

日本風工会 名誉会員・元会長
Honorary Member and Former President, JAWE